

田宮虎彦文学における「障害者」

飯島 勤

はじめに

本論は、田宮虎彦の文学作品における「障害者」（以下「」は略す）の描き方について、考察する。このことにより、文学作品の障害者描写はいかにあるべきか、またそもそも障害とは何であるのか——という問題に迫れるならば幸いである。

筆者はこれまで、田宮文学について本論のような考察があることを識らない。田宮は、多くの作品で障害者を描いたが、ほぼ脇役に描いている。それが、田宮作品の障害者描写に、あまり関心が寄せられてこなかったゆえんであろう。だが筆者は、田宮の描いた障害者は、その一人一人が微妙な位置にあり、実は作品構成に大きく影響しているのだと考えるのである。田宮が描く障害者は、ほとんどが、物事の矛盾を見つめる、冷静なまなざしをもつ存在として描かれている。あるいは、日々の苦渋にみちた生活にあえぎながら、自分の運命をじっと見つめ、喜びや哀しみにそっと身を

置いて生きる人として描かれている。もしこれらの人物を登場させなければ、それこそ作品全体にずしんとした錘のよ
うなものがなくなってしまうのではないか、そんな印象すらもつ。

田宮には、障害者にかぎらず、いわゆる弱者への、ぬくもりのあるまなざしを感じられる。だから、作品がいつも重
苦しい調べを奏でるにもかかわらず、読者はなにか清澄で温かな血流を感じとれる。こうした文学表現の背景には、お
そらく、田宮の体験的心情や当時の社会への強い問題意識が反映しているのであろう。

本論は、以上のような趣旨に基づき、田宮のいくつかの作品の読みとりを通して、考察を進める。なお、引用文献は、
筆者の執筆方針で、各引用文の直後に明記することとした。また、引用文中の改行箇所は詰めて表記した。

一、田宮虎彦の人と文学

田宮虎彦は、一般にもう少し関心を持たれてよい作家であろう。だが今日では、すでに「忘れられた作家」と言っ
ていいほどになってしまった。そこで、ごく簡単なプロフィールを紹介しておこう。

田宮虎彦（たみやとらひこ）は、一九一一年（明治四四）東京で生まれた。父親の仕事の関係で、幼少期には関西方

面を転々としたが、神戸の中学から三高を経て、一九三三年（昭和八）東京帝国大学文学部国文学科に入学した。在学中は、帝国大学新聞編集部に入った。そのころ、「部屋」という同人雑誌を出し、小説の執筆も始めた。また、武田麟太郎に師事する。ついで一九三五年（昭和一〇）、同人雑誌「日曆」に加わった。

一九三六年（昭和一一）大学を卒業して「都新聞」（のちの東京新聞）に入ったが、一〇月「人民文庫」の研究会に出席したところ、無届集会を理由に検挙、会社も辞めなくてはならないことになった。そのあと国際映画協会の嘱託となり、翌年ここで、妻となる千代と出逢った。さらに女学校教師などいろいろの職に就きながら、作品を書く努力を続けた。田宮が注目を浴びたのは、戦後のことである。一九四五年（昭和二〇）敗戦後、「文明」の編集にあたりながら、作品も盛んに書いた。やがて、『霧の中』（一九四七）、『落城』（一九四九）などの歴史小説にも新境地を開いた。また一九三五年（昭和一〇）前後の暗い青春をあつかった『足摺岬』（一九四九）や『菊坂』『絵本』（ともに一九五〇）などの半自伝風のもの、現代社会の矛盾をすどくつく『異端の子』（一九五二）、『沖繩の手記から』（一九五六）などを次々と書いた。『絵本』では、不動の地位を得た。一九五六年（昭和三一）十一月、妻を胃がんで喪った。

なお、田宮は、一九八八年（昭和六三）一月二日に脳梗塞で倒れ、四月九日投身自殺により一生を終えている。事由は、あきらかではない。

以上、『田宮虎彦作品集』第六卷（光文社・一九五七・本人年譜／二六八―二七三頁）を参考に、筆者が事実のみを簡略に整理した。

二、いくつかの作品を例に――

(一) 『絵本』における典型的描写

さて、本論に入るが、田宮の障害者描写を見るには、まず、代表作『絵本』を、典型的作品として挙げるべきだろう。『絵本』は、発表の翌年、「毎日出版文化賞」を受けた名作である。『絵本』には、田宮自身とおぼしき苦学生「私」の生活と、貧しい下宿屋の同居人や家族の悲しいドラマが描かれている。特に、世間の偏見にさらされて自死する隣室の不幸な中学生や、家主の息子で身体障害のある少年に注がれる田宮のまなざしは、不条理な時代を告発する誠実な文学表現だろう。

佐野・鍋山の転向のことが出てくるので、一九三三年（昭和八）、日本が戦争にむかつて突き進もうとしていた、重苦しい時代が舞台だろう。この年は、ナチスが政権を獲得、小林多喜二の獄死、日本の国際連盟脱退、昭和三陸大津波、滝川事件、平成天皇の誕生等々、重大事件の勃発した、まさに時代の転換点だった。田宮が、二十二歳（本人年譜による）で、東京帝国大学に入学した年である。この作品を発表したのが、戦後の朝鮮戦争勃発の年であったことも、注目すべきだろう。田宮は再び、時代の暗雲を感じとったのではないか。

「麻布霞町の崖下にあった私の下宿には、三聯隊の起床ラッパが遠くかすかにきこえて来た。それは、青山墓地の崖

肌を這い木々の下枝をぬって、切なくなしげに聞えて来ては、しばらくはしめつぽい余韻を私の耳にまつわらせるのだった。私は大学にはいったばかりであった。というより、やっと大学まで辿りつくことが出来たばかりといった方がよかつたであろう。三聯隊の起床ラッパがきこえて来るのは、そんな私が夜通し謄写版の原紙をきりつづけ、やっと冷たい蒲団にくるまつた頃であつた。私は、これからつづく大学の三年間を、その謄写版の原紙きりの仕事だけで支えていこうと真面目に考えていたのであつた。」(以下『絵本』の引用は、新潮文庫・一九七四・三九刷『落城・足摺岬』所収／二〇二頁)

かように、出だしから、なんとも重苦しい旋律が流れてくる。田宮の小説の基底には、絶望や貧しさ、不安や憎悪などの、深刻な感情が横たわっている。きわめて陰鬱な調子を奏でる。だがそれは、けつして人をうちのめすような暗さではなく、ヒューマニティーを感じさせるものである。

『絵本』の主人公「私」は、父親にあらがうようにして東京に出た。母親が苦勞の末そつと手紙に忍ばせるわずかばかりの金に心を痛めながら、なんとか学業を続けている。「私」が見つけた下宿は、東京中捜し歩いてもなかつたほどの、辺鄙な地にある二食付き十二円五十銭の最低級のところだつた。田宮は、この下宿探しの経緯で、裕福な教授の留学話や級友の持家の話などもひきあいにして、「私」の貧しさを際立たせている。

この小説は、「私」が、この下宿に入りそして出るまでの物語だ。「私」のおいたちや学生生活、家主の家族のことや当時の社会状況などが描かれている。「私」も、わずかに生活の糧とする謄写版の原紙切りが思うようにいかず、いま

にも体を壊しそうな無理をして大学生活を送り、将来への不安を抱えている。人びとの不幸、子どもたちの苦しみに、自身なにもできぬ歯がゆさをかみしめる。「私」はやがて、この下宿を出ることになる。その別れ際に、食費を割いて買った一冊の絵本を、体の不自由な少年に贈る。それが、この小説の題名になった。

その体の不自由な少年は、家主の長男であった。家主一家は、老婆と夫婦と四人の子どもの七人家族で、貧困にあればいい。「私」に家賃をぎりぎりまで値切られても、部屋を貸さずにいられないほど窮乏していた。家族は疲弊し、いさかいてもたえない。田宮は、これでもかというように、この家のぬきさしならぬ状況を強調する。少年の障害も、それら不幸の一つとして描いたことは明らかである。

しかし、田宮は、少年を、不幸な存在としてのみ描いていない。この家族の苦悩は、「脊椎カリエス」のために体が不自由で、十三歳になるこの少年の、純粹な眼を通して描き出される。「私」は、「十歳の妹よりも小さくしなびた顔」をした、この美しく澄んだ声の少年と、心がかよいあうようになる。文春という名だ。

「じっと寝てばかりいると頭は剃刀の刃のようになるとぎすまされて行くのか、私には、少年の言葉が十三歳とは思えないほどに大人びて聞える時があった」（二二一頁）。そんな少年と、老婆のやりとりを聞き、「そうした二人の言葉で、私はいつか、この一家の過去と現在とを知ることが出来た。あるいは、それは将来もいつてよかつたであろう。そして、もっとつきこんでいうならば、あるいは、私自身の現在も将来も、この二人の言葉の中にちりばめこめられていた

かもしれぬ」(二二二頁)と、思うのであった。

こんな家主一家の不幸を作り出しているのは、いったいなんなのだ。苦悩する人びとの、いったい誰が悪いと言うのか……。『絵本』の中で、家主の家庭にいさかきがあった翌日の、「脊椎カリエス」の少年とのやりとりがある。

「少年の眼には涙がいつばいたまつて、黒い瞳がきらりと輝いたと思うと、『——さん、おばあちゃんも、お父ちゃんも悪くはないねえ』と訴えるように私にきいた。私は、その言葉を、『何のことだい?』とききかえそうと思ったが、それは出来ず、つい、ふっと、『悪いことはないんだよ、誰もわるくはないんだよ——』と、答えてしまった。だが、私にそういききってしまう自信はあつたらうか。その頃の私は、すべてを憎んでいるという、その言葉とは全くうらはらな気持であつたのだ。老婆も悪ければ父親も悪いんだ——といつてしまいたい悪魔のような囁きも、実は、昨夜下の人たちの慟哭をききながら、私は心にいじめていたのであつた。それは、私の心の中で、淡路町の謄写印刷の支配人や、下の家族たちがこうした悲しいいさかきをせねばならぬ僅かな金を、使いもせぬ広い部屋に惜し気もなく使い果している西野に対する憎悪とももつれあつていた。世の中が腐肉のように腐りはて、私たちはその血膿のようなものではないだろうか。しかし、病んでいる少年の眼差の中には、そんな憎悪に似たものは翳もなかつた。私の心には、それが、不思議な哀れみをしのびこませるのであつた。」(二二二—二二三頁)

ここには、障害のある一人の少年の曇りのない眼を通して、社会の不条理が鋭く照射されている。これが、田宮作品における障害者の描き方の、典型的な例である。

(二) 児童問題への田宮の関心

ところで、田宮は、障害者だけでなく、児童の問題にも強い関心を寄せていた。障害者問題と共通するので、触れておく。同じ『絵本』の中の薄幸な中学生を、例に挙げよう。

隣の部屋のその中学生は、「私」が夜通しガリ切りをしてふとんにくるまるところ、三聯隊の起床ラッパが鳴る前に起きて新聞配達に出る。福井義治といった。リューマチを抱えながら、田舎から出てきて新聞配達などをして苦学している。父は教員だったが、半年ほど前に病死し、その前に兄が上海事件で中国軍の捕虜になって殺された。肉弾三勇士がもてはやされたその頃だ、虜囚の恥だと家族はさげすまれ、一家の生活も崩壊する。

結局この中学生は、おいはぎの誤認逮捕で、警察官から竹刀でぶたれながら「お前も赤だろう」と侮辱され、供述を強いられた。まもなく真犯人は逮捕されるが、心の傷にたえられず自殺してしまう。必死に生きる少年に、社会の偏見が、追い討ちをかけた。

田宮の『絵本』のなかの中学生のまなざしは、戦災孤児に対するものと重なるものがある。田宮は、一九四七年（昭

和(二二)、文明社刊『戦災孤児の記録』を、島田正蔵らとともに編集した。敗戦後、家族を失った子どもたちが巷にあふれ、児童福祉法も成立した頃のことである。田宮は、初版のあとがきでこんなことを言っている。

「戦争は終わった。戦争はすでに過去のことだ。いまはなにもいわなくともよい。だが、戦争によつてその運命をゆがめられた人びとの現実の苦しみや悩みは、戦争とともに葬り去ることはできない。戦災孤児の悲痛な現実は、わたしたち自身の問題なのだ。」

一九七一年(昭和四六)の再刊あとがきでも、「敗戦直後の大都市にはそうした孤児たちがいたるところにいた。孤児たちは、なぜその悲惨な現実にさらされねばならなかったのか。孤児たちには、敗戦の責任などあるはずはなかった。つまり、孤児たちこそが戦争のほんとうの犠牲者であった。」と、書いている。

戦争の狂気は真つ先に、いたくない子どもや、困難を抱える者たちを、苦しめる。先の大戦中ナチスは、優生計画により、子どもを含むおびただしい数の人間を殺した。今日でも、世界では推定二十五万人の少年兵が戦闘に加わり、五秒に一人、幼子が飢餓のため死んでいる。無力な存在として時代の横暴に翻弄されていく子どもたちを、田宮は、他の作品でも多く描いている。『少女の聲』や『異端の子』で、戦争と子どもの問題をとりあつた。『少女の聲』は、戦争で家族を失った引揚げ児にまつわる話だ。『異端の子』は、いわれなき差別(シベリア帰りの「赤」の子という烙

印)を受ける姉弟の話で、弟は脚が不自由だ。『小さな赤い花』という作品は、直接戦争には触れてないが、朝鮮問題を背景に、共に親の愛に恵まれない男の子、脚の不自由な女の子を描いている。これらの子ども像も、『絵本』の二人の少年と重なる。親や家族を失った子のことは、歴史小説にも見られ、『霧の中』は、維新の戦で家族を失った子の、その後の人生物語と言うべきだろう。

田宮は、当時から、こうした子どもの社会的問題を文学でとりあつかった稀有な作家である。子どもたちの不幸を、障害者問題と同様に、社会の問題としてとらえていたのだ。このことは、評者からもほとんど顧みられていないが、田宮が「わたくしたち自身の問題」と感じたことは、児童問題でも障害者問題でも、きわめて重要なことなのである。

(三) 他の作品における障害者描写

本論にもどろう。田宮は、『絵本』にかぎらず、ほとんどの作品に、障害者を登場させた。そして、その描き方には、共通性がある。『絵本』以外の、いくつかの作品も見よう。

● 『おぼろげ』

『ほおずき』（三笠書房・一九七二『お別れよ』所収／発表雑誌は一九六七年五月「オール読物」という作品がある。

この小説も、田宮自身を思わせる久良（ひさよし）という主人公が、父の鍊一郎の死後の始末のため、郷里の高知県の或る町に帰ったときの話だ。たまたま料理屋の生簀のそばで、漁師の内儀さんたちの中に、十七、八歳の娘を見かけた。その娘が、かつて神戸の久良の家にいた、「キサ子」の思い出をよみがえらせた。キサ子は、久良の母・多喜恵の叔母にあたるウメの娘だった。

ウメは、いわゆる知的障害者だった。田宮の母の叔母も、「脳膜炎の後遺症で」軽度の知的障害があったというが（『愛するということ』三九頁「女、その不孝」）、そんな面影を感じさせる作品中人物である。ウメは、旧家の娘だったが、「知恵のおくれた娘」で、「御飯を炊くことさえ充分には出来なかつた」。一度嫁いだ家から戻され、二度目に結婚した夫にも死なれ「地獄の底にころがり落ちていくように不幸になった」。ウメは、実家に一時戻つたが、姉の婿にも嫌われて家を出る。娘のキサ子が、十五、六になったとき、キサ子を久良の家に奉公によこした。そして、自分の働き口から休暇をとるたびに、わが子に会いに来た。その時の当主、久良の父「鍊一郎はそんなウメが自分の家に来ることを嫌いな青虫でも見るように嫌つた」。それで、なにかとこの親子につらくあたり、暴力もくわえたので、最後はキサ子が家を出、親子二人はこの家に近づかなくなつてしまった。

田宮は、そうした自家のようすを描きながら、このウメとキサ子の親子が、ささやかな喜びを見出す情景を描いている。母子が、夜店に出かけたときのことだ。二人ではおずきを買うときの、たがいの思いやりや楽しげなさまを描写した部分が、それである。

「何か二人だけの楽しいことを話しあっているように、ウメも、キサ子もたのしさが心の底からこぼれて来ているような明るい笑いを頬にうかべていた。キサ子は、そんな笑いを、それまでも時々、久良にも見せたことがあったが、ウメがそんなに明るく笑っているのは、久良はそれまで見たことがなかった。何時もぼんやりと笑っているような顔をしていても、にぶくにこつたウメの眼はよろこびやたのしさを影さえ見えないうつろな暗いいろを悲しげによどませていた。久良はそんな二人に心をひかれて、二人の様子を見るともなくしばらく見ていた。二人は身体をすりよせあうほど寄せあつて話しつづけていた。ウメが何かおもしろいことをいっているようであった。すると、キサ子は身体を折りまげるほどたのしそうに笑つて、そんなウメに自分の身体を押しつけていった。やがて、二人の立ちどまったところはほおずきを売っている店であつた。白い瀬戸びきの大きな金盃が幾つも並べられ、その中にいろいろな色をした小さな貝の身のようなほおずきが水にしずんでいた。二人はその前にならんでしゃがみこみ、あれこれとえらんでいたが、そのうちどれを買うのかきまつたように、キサ子がえんじ色の帯の間からピンクいろのビーズ編の小さな財布をとり出した。すると、ウメがその手を強くおしとめて、自分の帯の間から茶色の手のひらほどもある大きな臺口をとり出した。久良は、二人の銭入れの中には、どちらの銭入れにも、お金といえるほどのお金などはいっていないことを知っていた。二人は、どちらがお金を払うかでいいあつていた。そして、とうとう最後にウメが白銅貨を出して、眼も口もいっばいに笑いながら、ほおずき売りの男に白銅貨をわたしていた。」(五〇―五一頁)

ここには、田宮の父の、ウメらに対する冷たいしうちのなかでさえ、しいたげられた者が、切なくささやかな幸福に

ひたるすがたが描かれている。それは、強権的な鍊一郎の価値観に対する、アンチテーゼでもあろう。そして田宮は、このウメとキサ子のやりとりを描き、照り返すかたちで、久良父子の（あるいは田宮父子の）葛藤をも浮き彫りにしてみせたのである。

● 『銀（しろがね） 心中』

『銀心中』（新潮文庫・一九六一）にも、障害者が登場する。主人公・佐喜枝は、戦争に振り回された、一人の庶民である。夫・喜一の戦死という誤報をうけて、夫の甥の珠太郎と婚姻生活に入る。しかし、夫が復員する。夫と元の生活に戻りはしたが、珠太郎のことが忘れられなくて、許されない愛の深みにはまっていく。夫の理解と珠太郎の配慮と、二人の善意のはざままで、佐喜枝も、道ならぬことはわかるのだが、珠太郎の後を追うことを繰り返す。珠太郎の消息を追って、やがて東北の山湯「しろがね温泉」にやってくる。珠太郎の行方はつかめない。哀しみをひきずった佐喜枝は、自死と思われる最期を遂げる。そのとき佐喜枝と心中したのではないかと思わせるのが、温泉旅館の下男、「牡牛の源」こと、源作だった。

そしてまた、この源作も、暗い過去をもち、身体にも障害を負っていた。田宮の描く障害者は、薄幸である。しかし、誰かしらが彼を慮ってくれる。源作の場合は、戦時における小隊長だった。源作自身も、佐喜枝の心のいたみを知る人として描かれている。

「それは、農奴のように親から子へ、子から孫へともう数代も、この山の湯宿につかわれつづけて来た自分の身の上であつた。ききとりにくい訛りで源作がはなす言葉を、佐喜枝も、やがて、わかるようになったが、源作は源作の父親も母親も、源作と同じように、牡牛のような醜い身体であつたことなど佐喜枝にはなして聞かせた。十二、三の頃から米俵を幾俵もかつがされた毎日が、そんな身体を作りあげたのであつた。源作は、兵隊に入れられた間だけが、自分のただひとつのたのしい思い出であつたともいつた。自分の歪んだ身体がどうして出来上つたかというわけあいを、自分に教えてくれたのは小隊長の少尉だつたと語りもした。四十五年の生涯に、その小隊長の思い出だけが、ぼつと明るんでいて、あとは吹雪の日のようなうす暗い日ばかりであつた——源作は漢口を攻めた時の山の中の戦いで、左の足に迫撃砲の破片をうけていた。そのため、左足の中指から小指までがなくなつてゐるのを、足袋をぬいで佐喜枝にみせたが、迫撃砲の破片は足先ばかりでなく身体の左側にいちめに傷痕をのこしていた。自分には、もう自分の父親がつとめあげたほどのことが出来ないことがわかつてゐるなどと淋しげに源作がはなすこともあつた。」(三二—三三頁)

ここに、もし源作という人物が登場してこなければ、この作品は、きわめて平板なものであつたろう。彼の登場によつて、単なる色恋の話を超えて、哀しみを抱えた庶民が、互いにいたわりあうすがたを描きだした。そして、直接は批判していないが、二人とも戦争の犠牲者である。ことに、源作の障害描写は、田宮の戦争に対する憎悪を、強く表現している。田宮文学の背景には、戦争をはじめとする社会問題が、厳然と横たわつてゐる。

ところで、この『銀心中』で、たった一行、唐突とも思えるかたちで、障害者が登場する部分がある。

「佐喜枝は、中央線沿線の、焼けのこった町の理髪店に住みこんで、何とかあえぎあえぎ生きつづけていた時に、敗戦を知った。とうとう敗けたらしいということは客の噂で二、三日前にきかされていたが、店主の啞の子供が父親に澄んだ声ではつきり敗けたとつづけている声をきいた時、佐喜枝は、はりつめていた気持が、ぷつと糸がきれたようにゆるんでしまったように思った。」（一七頁）

ほとんどの国民が、真実を伝えられることなく戦争が遂行され、敗戦の真偽も判断できなかった。そのなかで、田宮はなぜか、わざわざ「啞」の子を登場させ、その子が不自由な発声にもかかわらず、真実の声を発するという描き方をした。田宮の微妙な演出が感じられる部分である。田宮は、障害者を、このような位置づけで描くことが多かった。

● 『酒場ルルチモで』

『酒場ルルチモで』（新潮文庫『銀心中』所収）という小説では、神戸元町通りの小さな横丁にある「バア・ルルチモ」（ルルチモ・ヴィアージュ・イタリア語で「船路の果て」とか）の客・黄恵祥が、めずらしく障害（傷害）を負った、主人公的存在として描かれている。だが、この人物は、作品の中では、実に控えめな存在である。

「もう、ましお白髪（ましろ）の黄惠祥の頭は、ひどい生命のやりとりでもしたあとの、鉦（かね）で叩き割ったような傷痕があった。ツルツルと光った皮膚が奇妙にゆがんだ二つの頭——その頭は、もし二つの頭といえるなら、そういうのが一番ふさわしかったのだ——をつないでいた。眼もつりあがり、口もゆがんでいた。それが、中華人の水夫や火夫によくあるように、六尺近い大男なので、どんな荒くれ男にもめつたに驚いたことのない女たちも、その面貌には息をのんだのである。（中略）酒は底抜けにのんだけれども、決して悪酔い（あくすい）をしない上に、化けもののようなそんな面貌に似合わず、喧嘩（けんか）などまるでしやうにない気の弱い人の好い老人であつたのだ。」（九八頁）「恐ろしい面相の黄惠祥の眼差しには、そんな気配とはうらはらな和やかなものがただよつていた。」（一〇〇頁）

黄惠祥が何者なのかは、五〇年も昔にさかのぼつて綴られる。黄惠祥は、日露戦争のために父母兄妹とも生き別れ、大連の町はずれの豪家の下僕になつた。そこに、近藤という日本人の雜貨商がこの家と合弁の商いをするためやつて来た。黄惠祥は、その使い走りもすることになつた。近藤の内儀はいかにも因業で、十三、四になる先妻の娘の君枝を、生傷が絶えないほどいたぶつた。雇人たちはみな、君枝が自国を侵す日本人であることを忘れて、いたわるようにさへなつた。黄惠祥も、そうだつた。近藤は商売がうまくいかなくなり、やがてこの地を離れ、君枝も身売りをさせられしまったが、黄惠祥は、いつしか君枝を忘れられぬ人として恋うようになる（父性にも似た気持ちで）。

君枝の人生はそれからも変転を重ねた。黄惠祥は、陰ながら君枝の幸福を願つていた。黄惠祥が君枝を最後に見たのは広東で、軍に出入りしている須藤という日本人商人の妻としてだつた。しかし、君枝はここでもしいたげられていた。

いわくがあつて、黄惠祥は、この須藤を殺害することになる。黄惠祥は、その時の争いで負傷し死線をさまよつたが、生き延びたのである。

黄惠祥がこの酒場にたどり着いたのは、君枝に似た「蓮華婆さん」のうわさを聞いたからだ。下積みに生き続けた一人の中国人の、切ない純愛話である。或る不幸な女性のすがたを、陰からいつも見守り続ける人物、しかも彼は、下積みに生きる者である。この小説の最後は、こうだ。

「『ジョージ、この自分は蓮華婆さんをはりにこのルルチモに通つて来た、さつき言つたね。この自分は、はじめこの店に来た晩、蓮華婆さんを見て、はつとした。蓮華婆さんの後すがたや横顔が君枝そっくりだったんだ。勿論、赤の他人に違ひない。日本では他人の空似つて言葉があるじゃないか。けれど余り似ているのだ。この自分は今夜、もうこれがこのルルチモに来る最後の夜だと思つと、この蓮華婆さんにひとこと言つてみたかつたんだ。違ふ人にきまつてゐるにしても、似ている人はなつかしいもんなア。ジョージ、おかしな恋の物語だろう。もう六十をとづくにすぎつてつたお化けみたいなこの自分の物語——もう恋の物語だなんて言えないかもしれんな、だがこの自分はこの恋を——』」

黄惠祥がそこまでいつた時、今までだれ一人いなかつた料理場で、何か重いものが倒れるような音がした。黄惠祥が言葉きつたのと、ジョージが聞きじりの汚れたカーテンをおしあげたのとは同時であつた。そこには、何時の間に料理場に来ていたのか、蓮華婆さんが両膝を床につき、わなわなふるえている手で柱をだきかかえるようにして、うつろな瞳をじつと黄惠祥になげかけていたのであつた。」（一一八—一一九頁）

● 『荷馬車』

『荷馬車』（新潮社・一九六八『二本の枝』所収）は、やはり田宮を思わせる「健良」が同級生の集まりに出て、小学校の担任だった川村先生の話の聞くところから始まる。川村先生は、一人の忘れられぬ生徒がいると言う。この生徒は、おそらく今日でいう軽度の知的障害児であつたろう。

遠足のときの出来事だつた。生徒たちが沢蟹採りに興じた。親から聞いたのか、或る生徒が沢蟹は皮膚病に利くと言うので、皮膚の弱い川村先生が、それをもらつて帰ることにした。すると子どもたちはまた、先生のためにと一生懸命沢蟹を採り続けてくれた。ところが、一人の生徒が時間までに戻つてこない。

『その生徒はどの学科も成績がわるかつたし、動作ものろろしていて、ものもろくにいえなかつた、だから、まだ谷川のそばのどこかでぼんやりしているだろうと思つて、私はその生徒を探しに行つたのだが、私があともどりして行くとき、その生徒が何かうれしいことでもあつたように一人でここにこ笑いながら下りて来るのに気づいた、私が早く早くと呼びかけると、その子も私に気づいて、やはり笑いつづけながら下りて来て、だまつて手に持った帽子を私の目の前に突き出した、その子はそれまで私に笑つた顔を見せたこともなかつたから、私はそのことも不思議に思いながらその子が私の前に突き出している帽子をのぞいてみた、すると、その帽子の中にはいっぱい沢蟹がはいつていたので、その子は何もいわずにそれを私に突き出して、しかし、その子が何もいわなくても、私は、その子が、私のために沢

蟹をつかまえてくれたことがわかった、帽子の中に沢蟹は三、四十匹もいた、その子は一生懸命沢蟹をつかまえてくれたのだ、私は、その子の沢の水で濡れている帽子を受けとって、——お前は、それを私のためにつかまえてくれたんだね。といった、私がそういうと、その子にはっこり笑ったのだが、私は、今までに、あんなにうれしそうな笑顔を見たことがない、だから、私は、今でも、その子のことを忘れることが出来ないのだ』先生の話は終わった。」(一二八頁)。

不器用で、引つ込み思案で、貧しい一人の生徒、それはまた、「健良」自身の子どもの時のすがたでもあった。健良は、貧しさゆえに、教室で生徒のお金がなくなると、犯人に疑われたこともあった。そういう悔しさを知っている。

川村先生の話した生徒と健良は、同じようなタイプの子だったから、仲良くしていた。山で拾ったドングリを、たがいに持ち帰れと、譲り合った思い出もある。その子は、勝次とあって、健良の唯一の遊び相手だったが、大人になり不幸にも戦死した。田宮は、そうした登場人物に、安易な解決は求めない。ここでも、苦難を苦難のままにして終わる描き方をした。田宮は、時代や社会に翻弄されつくす人の哀切を、表現しなかったのだろう。

『荷馬車』を読んでいて、筆者は、障害児教育・福祉の先達である近藤益雄(一九〇七—一九六四)の、「手をひく」という詩(明治図書・一九七五『近藤益雄著作集・7』一二〇頁)を思い出した。川村先生の、ひいては田宮の心情に通ずるものがある。

手を ひいてやろうと、

わたしが 手をだすと

この子も

手を だしたが

それは

いつものように

よだれに ぬれていた

それで

その手を いそいで ひっこめて

ごしごしと じぶんの服で こすって

ぬぐうてから

この子は

うれしげに

わたしの手を にぎった

かわいく

ぬぐく

いじらしい手であった

「わたし」とは近藤、「この子」とは知的障害児のことだ。この詩には、むずかしい言葉も、気のきいた言いまわしも、こごちよいリズムもなんにもない。しかし筆者は、障害者理解のありかたについて、深く学ばされた。「この子」は、手を差し伸べた近藤から、なぜいったん自分の手をひっこめたのか。きっと、よだれを垂らす汚いやつだと、いつも人に嫌われ、バカにされてきたのだろう。それにハッと気づき、大好きな近藤に嫌われないようにと、いじらしくも服で手をよく拭きとって握り返したのだ。近藤は近藤で、この子と手をつなぎあうという一瞬の行為にさえ、その子が今までどんなふうに生きざるをえなかったかを感じとった。でなければ、「かわいく、ぬくく、いじらしい手」などと思えるはずがない。「この子はかわいそうだ、不潔だ」などという意識では、どんなにしたって「汚い手」としか思えまい。「かわいく、ぬくく、いじらしい手」と感じとれたのは、ひとえに近藤の心のありようである。

「障害者を理解しよう」と、よく言われる。だが、「理解する」とは、どういうことか。それは、理屈の次元ではなく、「共感」の次元であるべきだろう。近藤益雄は、今日から見れば、障害者をあまりにも悲愴な面もちで見ていたのかもしれない。だが、この詩からもわかるように、障害者のなにげない行為にも琴線をふるわせることができた。筆者の言う「共感」とは、そういうことである。

田宮の『荷馬車』の中の川村先生の話も、こういう次元のものではなかったか。それはまた、ほかならぬ田宮の心情

の表われでもあったと、筆者は考える。田宮文学における障害者描写を考えるうえで、こうした田宮の感受性のするどさは、特筆すべきである。

●エッセイ・文学論などにおいて

エッセイ・文学論などにおいても、田宮はしばしば障害者を話題にした。『若い日の思索』（旺文社新書・一九六七）「私たちは何のために生きるのか」には、田宮が女学校の教師をしていたときの障害生徒のことが書いてある。田宮は、障害者を、このように見ていたのだ。障害者をやや美化しすぎるきらいもあるが、きっと田宮の純粋な気持ちであろう。

「私が尊敬する一人の女の人のことを書いておこう。彼女は、私が女学校の教師をしていた頃に生徒だった一人だが、幼い時に片目を失明していた。その上、生まれつきに心臓に欠陥があつて三十代の後半という若さで死んだのだが、死ぬ少し前に、『私は、このような身体に生まれたことに感謝したい、なぜなら、もし私が失明などという不幸を知らず、また健康な心臓に恵まれていたとしたら、私はおそらく思い上がった傲慢な女になっていたと思いますから』と言った。彼女は私の生徒であつたが、生徒であるよりも先生であつたといわねばならない。別の時に、彼女は自分の信条として、『私は、どんな困難も、避けず、ごまかさず、正面から立ちむかつて、それをのりこえていきたい』といったこともある。その彼女の言葉は、今は、私の座右銘になつてゐる。』（二八一―二九頁）

三、田宮の障害観と今日の障害概念

さてこうして、田宮作品の障害者描写を見てくると、田宮の障害観は、「不具」「啞」「知恵おくれ」等の呼び方を始め、今日の人権理念から見れば、一見、誤った認識を持っているように思える。『絵本』の身体障害の少年が「事故で脊椎カリエスになった」などという叙述にしても、障害者について詳しい認識があるとは思えない。田宮にとって障害者とは、やはり不幸であり、恵まれていない人なのだ。障害者の存在を、やけに教訓的で、美化しているのも、その裏返しではないだろうか。障害者をいったん固有の欠陥をもつ人間としてとらえ、その不幸な人がひと一倍努力を重ねて可能性を見出していくという、センチメンタルなとらえ方もする。これは、障害者を暗くとらえすぎ、憐みの対象にするにすぎないとも言える。

文学表現を、人権理念で断じるのは、あるいは不適切かもしれぬ。だが筆者は、たとえ文学作品でも、配慮のない障害者描写は避けるべきだと考える。それが過れば、文学という名による、偏見の刷り込みだったり、言語暴力だったりするからである。こうしたことが、今日の文学作品でも、いまだ無造作に行われていることは、残念というほかない。

そこで、一応今日の人権理念が到達した障害概念について、触れておくこととしよう。今日の障害概念は、障害を「個人の欠陥」とは考えていない。その人と環境との「関係性」としてとらえることが、基本的な理解のしかたである。障害概念が、「医療モデル」から「社会モデル」に変わったという言い方もされる。有史以来、障害者の歴史は、差別と

隔離の歴史であつたと言つても過言でない。その根本には、障害者に対する侮蔑と偏見があつた。障害者に対して、不幸な者、気の毒な者、生まれてこない方がよかつた者という、ステイグマ（烙印）を押しつづけてきた。そのことが、障害者を特殊な生活に置き去りにしてしまつたのである。今日の障害概念は、もうけつして、そうあつてはならないのだという、人類の歴史的反省に立つ概念なのである。WHO（世界保健機関）が障害概念を整理した「国際生活機能分類」においても、「国連障害者権利条約」の考え方も、「国際障害者年行動計画」に謳われた障害観も、どれを見ても理念的にはそうである。

もつとも、実際には、そのような理念が、いまだ広く通用していかないことは、現実が物語つている。したがつて、理念的障害観のみで済むわけではない。障害というものを、もつと生活現実の中で、正味に理解する必要がある。筆者は、永年障害者運動に関係してきた。その中で「共に生きる（共生）」という言葉を、自身もよく使つた。それは、ノーマライゼーション社会への前進を目指した言葉だとしても、近年実感の乏しい言葉になつてしまつていると憂える。こぎれいな使い方に流れ、心に迫るものがなくなつてきている。「共に生きる」ということは、そもそも美しいイメージだけで語れない。共に苦しみ、ぶつかりあふ概念も、含められねばならない。それでも、一緒に生き合うのだという覚悟なくして、ノーマライゼーションなどは実現しないだろう。「共に生きる」ということを論じるとき、ともすると修辭の次元で終わつてしまふことがないだろうか。いかに自分が障害者を理解しているかという釈明は、修辭の次元ではない。それでも駆使できるが、現実の障害者問題が、それで解決するだろうか、否であろう。

ではどうするかということになるが、まず障害というものの様々な実際様相に眼をやる必要がある。現実生活において、何が、どう、当人を苦しめているのかを、明らかにしなければならぬ。そしてそこに、自分たちがどのように関与しているのかも見きわめなければならない。障害者の個々の生活問題としての障害実態を的確にとらえつつ、理念的障害観にかぎりなく近づこうとする理解のしかたを、筆者は「実存的障害観」と呼ぶことにしている。「理念的障害観」と「差別的障害観」とのあわいにあって、障害者が負わされた困難を、どのように取り除くべきかを模索する努力のことである。

障害を、真に関係論的にとらえようとするなら、その人の心身機能・構造に見る不自由さのみを判断する個別的障害観（「差別的障害観」）は、排されなければならない。あるいは、障害というラベリングから出発することもやめなければならない。その人が、どのような不自由な環境におかれているか、そのためにどんな苦しみを背負っているかを慮るのが、「実存的障害観」である。それには、本人の実感や周囲の者の実感も含め、丁寧な理解方法が必要であろう。そして、「実存的障害観」をより確かなものにするには、生活上の様々な面で、障害者問題を多面的に理解する努力が求められる。つまり、そうした努力は、日々の暮らしの中で障害者と共に生き合うことを、必然のものとするのである。

筆者が文学表現における障害者問題に関心を持つのも、こうしたことと関連している。人間生活の機微を表現する文脈の中に描かれた障害者は、仮象の存在ではあるけれども、むしろ「実存的障害観」をより確かなものにするために、重要なてがかりをあたえてくれるのではないか。そこには、人間の感情や生活が精緻かつ具体的に描かれる可能性があ

るからである。理念や法律だけでは語れない、障害者のすがたを緻密に描き出しうる。矛盾もあるし、醜さも伴うだろう、ときには、人権を無視したような表現すらあろう。それらは、或る意味で正さねばならぬが、一方で、理念に凭れきらない切実な障害理解をみちびきだしうる。

いずれにしても、本論は、小説に描かれる登場人物に対する障害についての描写法を断罪することが目的ではないので、障害概念のなんたるかの詳細な考察は、別の機会に譲ることにする。ただ言えることは、田宮は、障害者の現実生活の微妙な機微を語り得た文学者の一人ではなかったか。誠実なその筆が描き出した障害者像は、一般の人間が忘却してしまいがちな、ものの見方を有する存在として描かれている。障害者福祉の先達、糸賀一雄（一九一四—一九六八）の名言に照らして言えば、「この子らに世の光をではなく、この子らを世の光に」するという発想転換が、図らずも田宮の文学表現にはある。

四、田宮の障害者観の基底にあるもの

田宮の障害者の描き方は、文章表現の次元では巧緻をきわめている。しかし、障害者に対する見方は、そもそもたくまざるものであったと考える。田宮の人間性から、湧きいでるようにして生まれたものであろう。では、こうした田宮

の障害者観は、どこから来ているのか。筆者は、次のようないくつかの事柄が、田宮の感受性をより繊細にし、障害者に対する共感的まなざしを形成したと推論する。そのことを物語る、いくつかの例を、以下に挙げてみよう。

(一) 田宮の生命観・宗教観

まず一つは、彼が生来病弱だったことがある。結核も病んでいる。いわゆる弱者に対する、身に染みた共感である。田宮によれば、「私の虚弱の原因は、乳児のころにわずらった肺門リンパ腺の病気のためであろうと思われる。その後も病気は幾度か再発して、そのたびに療養生活をした」(『若い日の思索』一一五頁)という。障害者理解は、「その人の身になる」という基本的な心情ぬきには考えられない。自分自身にも、なにがしかの不自由がある、あるいはそうなりうる、いや、みなそうなって死んでゆく……そうした心情が形成されるところに、障害者理解は生ずるのではないか。田宮は、この「人の身になる」という意識が、きわめて強い作家であったのではないか。田宮の病弱さは、その心情をより繊細な境地に導いたのである。

病弱だった田宮を心配したのか、母親は、田宮を信仰に触れさせた。病と宗教は、密接な関係にある。田宮は、幼くして接した宗教によって、一層生命の神秘さや大切さを意識したのではないか。障害というものは、生命の神秘や宇宙の不思議と、密接に関連している。田宮は、無宗教であったようだが、宗教的心情を持っていた。このことは、田宮を

語るときに、これまでまったく語られていない。『若い日の思索』に、こんなことが書いてある。「神と人生」という題である。

「厳密に言えば人生でも死でもなかったかもしれないが、私の目の前にそれがはじめて姿を見せたのは、私がまだ小学校にはいったかはいらぬかの頃、私が立っている大地が地球という小さな星で、宇宙という際限もなく広い虚無の中にうかんでいるということ聞かされた時であった。私が生まれたのは明治四十四年だが、その少し前に地球と彗星とが衝突するかもしれないという噂が流布されたことがあった。おそらく大人たちはその時の思い出を話しあっていたのであろう。そして、私は、その話を聞いたのであったと思う。私は、その刹那、目のくらむような恐怖に打ちのめされたのであった。流れ星の多い季節で、夜、空を見上げていると、星が尾をひいて消えていくのがいくつも見えた。やがて地球が流れ星になる時、今、目の前に見えている家や電信柱や私たちはどうなるのであろうかと思うと、私はどうしようもない不安になげこまれたのであった。考えようによってはそんな他愛もない怖れは、若かった母には説得のしようもなかったであろう、母は私を母が信者であった天理教の教会へ連れていった。教会の夕方のおつとめがすんで、教会の先生は母に連れられた私に、天理教の神の助けを授けるおたすけという祈りをしてから、『そんなことは神さんがあんじょうしてくれはる』といった。神様がそんな不安なことがないように都合よくはからってくれるというわけであった。その答は、私にはじゅうぶんには安心をあたえてくれなかったが、さしせまった不安はなだめてくれた。」

「私は、五十年近い前に、若い天理教の布教師の先生がいつてくれた『神さんがあんじょうしてくれはる』という言葉、この頃、折りにふれて思い出す。明治以後の日本人が宗教を失ったのは、明治の社会では科学が宗教の役割りを果たしたからだと思う。戦後は、明治以後宗教が空白にした部分をうずめていた実践道徳をも失った。安易に神を求めるべきではないが、人は心の中に神を求めないでは生きていけないのではないかと、幼い時に聞いた言葉を思い出すたびに私は考える。」(二八頁)

(二) 田宮の社会的問題意識

田宮作品では、父親との葛藤関係が、大きなテーマになっている。それは、すでに多くの評者が論じている。田宮の味わった、この肉親との間の愛憎と苦悩は、人間心情の變をこまやかにせずにはいられなかつたろう。

しかし筆者は、父と子の葛藤という田宮のテーマは、実は仮のものであつて、そこには社会的テーマが隠されていると考える。田宮が、読者には耳障りなほど執拗に、父親を冷酷な人間として作品化したのは、単に「父親憎し」の感情ではなかつたろう。そこへ連なる家門や、封建制度、絶対天皇制国家などの、重層的な、がんじがらめの社会的抑圧への反発を表わしていたと考えるべきだ。だから、強権的父親像に対する、病者、障害者、子ども、女性らは、社会的権力関係における対極の表象だつたのではないか。

そこで、筆者はここで、田宮の社会的問題意識を特筆しておくこととする。この社会的問題意識こそが、田宮の障害者理解の根底にあると考えるからである。そのために、旧態依然とした障害観にもかかわらず、文学表現においては、社会的問題を背負ったところの障害者が描かれることになった。

田宮の作品を見ると、時代の空気を敏感にとらえ、時代に翻弄される名もなき人びとを悲しく描き出している。田宮は、目立った行動には現さなかったが、人びとに不幸を強いる社会の横暴を鋭く凝視していた。田宮は、そうした感情を、「庶民的正義感」と言い、「庶民」の一面について。次のように言っている。この表現は、まるで彼が描き出した作品中の障害者像のようでもある。

「父祖代々、ゆえもなく下積みであつた苦しい生涯のつかかさなりが、正邪を肌で見分ける力となつたのではあるまいか。彼らは、生まれながらにして権威の地位にあるものや、富貴をほしいままにしているものへ、本能的な敵意を感じる。(中略)彼らは、彼らだけにわかる憤りを、じつと胸にかみしめている。そして、あるいは、それに意識されてはいないかもしれないが、彼らは彼らで、ひとつの大きなつながりの中に生きていることをどこかで感じているのだ。」
(光文社・一九五九『随筆・たずねびと』一七頁「人生について」)

田宮の文学は、一見暗い。障害者も、そうした文脈で描かれている。彼らは、みな無辜の民だ。いかんともしがたい

定めそのままに、様々な苦悩を背負っている。このよう人びとに対する権力の横暴、時代の危機は、どのように語られるべきであろうか。涙であるか、怒りであるか、笑いであるか……。田宮は、憂愁の情に煩悶する人びとを描くことで、いみじくもそれを表現した。田宮は、それを、『平家物語』を引いて、説明している。

「歴史の流れは、そうした一人一人の個人の夢にどうかかわらず非情に流れていく。一人一人の個人が我が身の幸福を願ったところで、歴史の流れの歯車にかみあうことがなければ、彼等の願いなど、結局空しい夢におわる。その挫折のかげで幾千幾万の人が悶え苦しんで流した涙をも、歴史の流れは冷酷に押しながしていく。悲痛な嘆きや涙は、一人一人の個人の願いと、その個人を押しながしていく歴史の流れとの相剋から生まれたものだ。だから、彼等の苦しみや悲しみには、歴史の流れの極印がぎざみつけられており、そのたうつ苦悶の姿は、そのままその時代の姿にもなるのである。平家物語がほろびいくものの哀れさを描くことで、その時代を確実に把握し、表現し得たのは、ここにその理由がある。」（光文社・一九六一『笛・はだしの女』九三頁）

田宮の社会体制に対する批判精神がうかがえる具体的な文章は、いくつがある。たとえば、大逆犯に仕立てられた、明治の社会思想家・幸徳秋水について、強い関心をもっていた。父親の郷里が土佐であることから、土佐出身の幸徳にも関心があったのだろう。

「林有造や板垣退助が明治政府に屈服した後も、秋水は、自己の思想を純粹に保持しつづけた。そのため現実社会の力関係は、秋水の生存をゆるさなかった。だが、秋水の生涯をみつめれば、そこには、ひとつの歴史の可能性が凝結されている。もし新しい時代の前進をはばむ様々な条件がなかったならば実現したかもしれない歴史が、秋水の生涯の中にだけ、時代に幾十年か先行して実現していたのだ。」（光文社・一九五九『若き心のさすらい』一六四頁「伝記のこと」）

あるいは『沖繩の手記』からに見られる次の言葉である。

「『大篠さんが、俺に、国家というものについて話してくれたことがあった、国家というものと、その中で生きている俺たちとのかかり方についてだったよ、国家をつくり出したのは、その中に生きている俺たちみたいな人間だが、国家は残酷に俺たちを殺すことが出来るのだ。』私は、慶良間の島を見ながら、大篠軍医長が言った言葉を思い出していた。『国家などというものを、人間はどうしてつくり出したのだ、もっとましなものを人間はつくれなかったのか』」（新潮社・一九七二『沖繩の手記から』二二四—二二五頁）

天皇の戦争責任についても、強い関心を示した。「皇孫誕生」という文章がある。

「あの長い戦争の敗戦の日まで、幾千万かの国民には、天皇さまの御命令は絶対でした。私たちの親や、兄弟や、友

だちは、天皇さまの御命令で、戦争にまいりました。そして、数多い外国人を殺し、自分たちも死んでいったのです。」
（『笛・はだしの女』一二四頁）

田宮は、大きな文学賞とは無縁だった。芥川賞や直木賞の選者も、彼の実力を認めたが、既に一流の作家だとし、あえて賞に該当させなかった。作家活動以外に、華々しいこともなく、文壇との交流も少なかった。作品も、善意に満ちた通俗小説とまがう一面もないわけではない。あの暗さにしても、不幸や悲劇を売り物にする書き物と、似通っていると思われかねないだろう。だが、そうしたことを、すれすれのところで超越しているのは、なぜだろう。田宮の描き出す憂愁が、自身の体験と心理を土壌にしながら、国家や時代の転変を憂うる志操と相まって、歴史の矛盾を鋭く告発しているからではないだろうか。そして、その告発は、抑制のきいた、耐えがたきを耐えた、無名の人びとの懊悩の叫びゆえに、一層心に迫る。

むすび

こうした様々な体験や意識がもったった繊細な感性が、田宮をして、世の中から虐げられ、困難を負わされた人びとに共感を覚えたのであろう。障害者に対するまなざしも、然りである。そこには、田宮なりの人間の幸福観というのがあった。それを、障害者という存在を通して再表現したということになる。筆者は、文学は、障害を誠実に描くべ

きだと考えている。作品の中で、障害概念を軽率に躍らせず、どこか基本のところ、田宮のような誠実さをもって表
現されるべきだと考える。そしてまた、一般的にも、「障害」という問題を考える場合に、同じ姿勢が求められるので
はないだろうか。障害は、かぎりなく「社会的障壁」なのであり、障害は、それが克服されればされるほど、社会自体
をも改良してき、障害者を特殊な人間としてみなすステイグマは排されていくだろう。

田宮は確かに障害をとらえるときに、「医療モデル」としてのとらえ方しかできなかったようである。しかし、障害
者の負わされた苦難は、田宮の筆によって社会的障壁を意味するものとして描かれ直されたと言ってよい。つまり、作
品というフィルターを通して、「社会モデル」としての障害を、結果的に描きだしたのである。その意味で、田宮は当
時の作家としては実に稀有な存在であり、そのヒューマニティーな筆法は高く評価されねばならない。そして、筆者は、
田宮の文学に、本質的な意味での「社会文学」の可能性を見るのである。

田宮の文学は、天寿を全うすれば、さらに深い領域に届いたことであろう。余聞だが実際、障害者問題についても、
山崎行雄『田宮虎彦論』（オリジン出版センター・一九九二）の年譜によると、田宮は「数年ハンセン氏病について取
材をつづけ、作品化を企図したが医学的に十分な理解を得るに至らず断念」したとある（三四〇頁）。いかなる事情か、
残念である。日本図書センター・二〇〇〇『作家の自伝一〇六』の清水均作成年譜でも、遺稿の中に『ある医師の伝記
（ハンセン氏病治療）』というのがあったとのことである。